

ロシア・ソヴェト全国書誌『図書週報』¹⁾ をめぐって (1907—1920) 下

小林 清美*

1917年の二月革命によって帝政ロシアは崩壊した。書誌家たちの長年の夢であった国立の書誌機関『図書院』が創設された。

そして十月革命、ソヴェト政権の誕生。ドイツとの戦争、内乱、外国軍干渉、封鎖、飢饉、疫病。人々は飢えと寒さに苦しみ、暖をとるため本は次々と暖炉に投げこまれた。

二月革命によって誕生した図書院は十月革命を経て1920年に廃止された。本稿は、この困難な時期に図書院がどのように全国書誌『図書週報』を出版したかの記録である。

Ⅳ 二月革命から十月革命まで

1917年旧暦2月25日²⁾のペトログラード全市はゼネストに突入した。

この日付で出版された『図書週報』No.8は内務省出版事業管理局による最終号となった。帝政ロシアの出版監視の典拠であった「禁本リスト」と「取調べられ発行許可された外国図書リスト」の欄は以後『図書週報』から姿を消した。最後の禁本リストに掲載されているのはL. マルトフらの『20世紀初頭におけるロシアの社会運動』などである。

3月2日に臨時政府が組織された。8日臨時政府委員D. カブニストを長とする出版事業管理局撤廃特別委員会が設置された。委員会の審議をもとに、帝政ロシアの出版物監視機関であった出版事業管理局は4月9日をもって廃止された。同時に委員会は印刷関係のすべての施設を指導する『ロシア印刷ソヴェト』の設立と、そこに附属

* こばやし きよみ 一橋大学経済研究所

1) «Книжная Летопись»

2) 日付は1918年2月1日まで旧暦による。新暦に換算するには13日を加える。

する『図書院』が国のすべての印刷物の登録事業を行うことを提起した。

4月9日に図書院の課題、構成などを検討するため出版印刷物登録小委員会が発足。会長には歴史学者P. シチョゴレフが就任し、東洋学者S. オリヂェンブルグ、S. ヴェンゲーロフら学者、書誌家、学術組織の代表者たちが加わった。六十五歳のトロポフも『図書週報』創刊からの編集者としての実績をかわれて参加している。国の書誌機関の必要性を痛感し続けてきたこれらの人たちによって図書院の任務は次のように決定された。

- 1) ロシアで出版される全印刷物の登録。
- 2) 全国書誌『図書週報』の出版。
- 3) レトロスペクティブな全国書誌の作成。
- 4) 大図書館への義務納本の供給、など。

これらをもとに4月27日に臨時政府決定「印刷事業の施設について」が公布された。図書院関係の項は、

Ⅲ. 以下の根拠に基づいて図書院を設立する。

- 1) ロシアの全てのカレントな印刷物、活版印刷所、石版印刷所、金属版印刷所、および他の同様の施設の定期、不定期刊行物の登録を図書院に委任する。
- 2) 図書院はロシア語の全ての印刷物資料の系統的な登録を行う。
- 3) 国家施設の図書供給のための図書ファンド形成とロシアで出版される全印刷物の国立の大図書館への供給を委任する：
(略)

X. 臨時政府の地方委員、あるいはそれに替わる人物又は機関に以下の事項を委任する：

- 1) 印刷所、定期、不定期印刷物機関の登録。
- 2) 国の大図書館のために印刷所より印刷物の見本³⁾を受領し、図書院へ発送する。
- 3) 活版印刷所、石版印刷所、および他の同様の施設の法の要求する事柄の遂行に対する監視。

結局『ロシア印刷ソヴェト』は創られなかったため、図書院は一時的に出版事業管理局徹廃委員会に属することになった。

3) 8部義務納本

5月16日、図書館は創設された。院長には国立の学術的書誌機関をもっとも待ち望んでいた人々の一人であるS. ヴェンゲーロフ(1855—1920)が就任した。彼は文芸評論家、文学史家、書誌学者、特にプーシキン学者として著名なベテルブルグ大学教授であった。彼は青年時代「人民の中へ」運動の洗礼を受け、当局から「人民の意志党」シンパとして監視下に置かれ、1899年には危険思想の持主としてベテルブルグ大学を追放された(1905年革命後復職)「筋金入りナロードニキ」であった。

彼は学生時代からジャーナリズムで活躍し、主としてロシア文学を論じた。「わが国の文学は一度として純粹芸術的関心の枠に籠ることなく、常に教師の声の響き渡る教壇であった」との政治的ヒロイズムの立場は『ロシア文学の英雄的性格』『十九世紀ロシア文学の魅力はどこにあるか』などの著作に一貫して流れている。

しかし彼の独自性は社会評論的文学史の枠では満足できなかった所にある。研究の過程で対象とする資料の膨大さに比較し、それを包括する書物のないことに気づいた。そこから彼の畢生の事業となった『ロシア作家学者論評書誌辞典』⁴⁾への取り組みがはじまる。彼は「祖国の文化の利益にわずかも寄与したありとあらゆる人物」の業績の論評と著作リスト、それらの人物に関する文献の網羅を目指した。しかし予定以上に枠を抜けすぎ、しかも売行きははかばかしくなく、完結にほど遠い段階で挫折した。その簡略版としての『ロシア作家辞典典拠』の試みも未完に終り、三度の試み『ロシア作家・学者論評書誌辞典、予備版』は1915年よりⅠ、Ⅱ巻を出版、Ⅲ、Ⅳ巻は出版を待つばかりであった⁵⁾。

さらに、彼は『辞典』の作業の際一人の作家の著作リストを作るのに何種類もの書誌にあたらなければならないことから、国書総目録『ロシアの図書(1708—1893)』⁶⁾の出版にも取組んだ。ここでも持前の徹底ぶりを発揮し、确实さと完全さを目指し、^{プブリツィナヤ}公衆図書館のカードと現物の照合を独力でを行い、六年の歳月をかけ、当時としてはもっとも完全なリストを作成した。だがこれも三巻を出しただけで、利益が少いのを理由に出版者に拒否され、未完に終わった。ヴェンゲーロフはこうした仕事における個人の力の限界を痛感したのであった。

またこれも『辞典』の補助作業として借金を背負込んで作っていた図書、新聞雑誌

4) Критико-биографический словарь русских писателей и ученых (от начала русской образованности до наших дней) Т. I—VI. Спб., 1899—1904. (Ⅰ、Ⅱははじめ分冊で1886—1899に出版された)

5) Ⅲ、Ⅳ巻は十月革命後の出版事情によって結局出版されなかった。

6) Русские книги. С биографическими данными об авторах и переводчиках. (1708—1893) Ред. С. А. Венгерова. Изд. Р. В. Юдина. Т. I—III. Спб., 1897—1899.

記事の膨大なカード（最終的には約200万枚）⁷⁾ もなんとしても個人の力では継続できなくなり、このカードの意義を認めた書誌家たちの請願によって1916年7月文部省令で文献書誌研究所が設立され、カード作りの作業が引継がれた。しかし予算は少く、思うような活動はできないでいた。

このように彼の書誌学的な業績はほとんど独力で成しとげられた。しかも同時に文学史研究などの仕事も行ってた彼の超人的なエネルギーは何だったのだろうか。彼の理想主義と完全への志向がその源泉の一つであり、そしてそれは彼の書誌をすべて未完に終らせた大きな理由ではないだろうか。こうした彼の特質が彼を長とする図書館の活動に良きにつけ悪きにつけなんらかの影響を与えたことは間違いないと思う。

ヴェンゲーロフにとって二月革命、そして図書館の創設は長年の夢の実現であった。彼は猛然と仕事にかかった。図書館をどこに置くか⁸⁾、出版管理局の事後処理などやるべきことは限りなくあった。

もっとも重要な問題は新しい義務納本体制の確立であった。モスクワでは臨時政府の決定以前に、前世紀末から今世紀初頭にかけてシンボリスト詩人として華々しく活躍したV. ブリュースフ⁹⁾を中心に3月27日モスクワ社会組織執行委員会に臨時に印刷委員部が設置され、印刷物の収集、登録が行われていた。図書館創設とともに収集と院への送付は常設のモスクワ印刷委員部が行った。ペトログラードにおいても印刷委員部が印刷所からの受領、院への納入にあたった。

地方では地方委員^{ゴミツツール}がその任にあたることになっていたが、臨時政府決定には任務遂行の具体的方法が指示されていなかった。ヴェンゲーロフは直ちに地方委員のための詳細な回状を作成、また地方委員の大会があれば出席し、院の任務と意義、それを支える地方委員の役割を説くなど、ことあるごとに啓蒙に努めた。

6月28日の院の幹事会でモスクワの印刷物登録委員ブリュースフの「大都市に以前の出版事業委員会のような委員部を創る必要がある」との書簡が聴取され、院もそれを受け、地方組織の創設に取組んだ。十月革命までに15都市に院の支部ができるなど、除々に地方との関係も確立していった。

6月から7月にかけて院への印刷物納入を呼掛ける数種のビラが撤かれた。

-
- 7) このカードはヴェンゲーロフによって集められた3,500点の自伝資料、25,000通の書簡とともにヴェンゲーロフ・アルヒーフとして、現在科学アカデミー、ロシア文学研究所、プーシキン会館に保管されている。
 - 8) はじめモルスカヤ街61、のちフォンタンカ街20。
 - 9) ブリュースフ（1873—1924）は1895年モスクワ大学生のときトーロポフが会長をしていたモスクワ書誌学サークル会員となった。著名な詩人であり、書誌学者でもあった。

7月26日付出版所へのビラには、「ロシアの精神的富」としての印刷物収集のために3月1日以降出版された図書のカタログ、パンフレット、ビラのリスト、定期刊行物リストを送って欲しいと書かれている。こうしたビラは出版所、印刷所、その従業員、新聞雑誌編集者、政治組織、大会の参加者、作家、学者、愛書家などへ巾広く撒かれた。その結果特に印刷所従業員と愛書家の協力が得られた。

規則的収集の困難であった定期刊行物の円滑な登録のため委員に納める5部義務納本とは別に1部を院へ直接発行元から送付する方法が採用された。

国立の学術的書誌機関としての図書館の任務をみると：

1. ロシアにある全印刷所、その他の印刷施設、出版所、書店の登録。
2. ロシア全土で出版された印刷物の収集。
3. これらの印刷物の恒常的な展示会の開催。
4. これらの印刷物の国立保存館への供給。
5. ロシアの印刷物資料の登録。
6. ロシアの印刷に関する統計の作成。
7. 詳細な書誌リストの作成。
8. ロシアで出版された新刊図書リストの定期的発行（『図書週報』）
9. ロシアの全図書と論文の詳細な学術的書誌作業。
10. ロシアのすべての書誌的資料の学術的分類。
11. ロシアの学問、文学など全分野別の系統的な書誌索引の発行¹⁰⁾。

院にはヴェンゲーロフのカード作業を引継いだ文献書誌研究所、学士院の自然科学・数学国際書誌局、「ロシアの学問」委員会が加わり、上記の任務を意欲的に遂行しようとしていた。しかし組織はできたものの臨時政府から確定した予算をもらえず、出版事業管理局の資金の残りでもやりくりせざるをえなかったため図書館の運営は容易でなかった。

二月革命後の『図書週報』は出版事業管理局撤廃特別委員会によって No.9—10（3月30日）から No.19（5月13日）まで出版された。その後図書館の管轄に入ったと思われるが、誌面に図書館の表示がされるのは No.27（7月8日）からである。各号とも編集者A. トーロポフと記され¹¹⁾、『図書週報』にとってトーロポフの果し

10) このほかに参考書誌図書館創設の取組みがある。最終的には25,000冊を下らないコレクションとなった。

11) これは1918年 No.46（12月9日）まで変らない。

た役割の小さくなかったことをうかがわせる。

マーシコヴァはこの間五ヶ月余りの図書館の活動を「創立当初の図書館は資金もなく、出版物の登録が著しく困難をきわめるなか、登録の空白を埋めるためにあらゆる努力をした」と評価している¹²⁾。

V 十月革命から1920年図書館廃止まで

十月革命はロシアの知識人を動員させた。ゴリキーでさえ「人々はたがいに殺し合うだろう。」「ロシアの現代の生活条件のもとでは、社会革命のための場所はない」と書いた¹³⁾。

ソヴェト政府が誕生した翌10月27日、モルスカヤ街の図書館では職員の全体集会が開かれ、ソヴェト政権に服従しない旨の決議がされた。11月14日、20日の全体集会でも同様だった。

こうした状況を背景にソヴェト政権では内務省再編成に際し、図書館廃止の提案が行われた。11月20日内務人民委員G. ペトロフスキーは「ソヴェト政権を拒否する旧内務省職員は解雇する」との命令を出した。翌22日図書館ソヴェト会議の席上ヴェンゲーロフは「院の職員は(ソヴェト政権に服従しない)との決定を下しながらも、政治的動機によって自己の文化的活動を中止することは容認できないとして、ある者は家で、ある者は院の建物で若干の緊急の仕事を行い続けた……」とサボタージュを打消そうとしている。

23日ジェルジンスキーに指揮された赤衛軍の部隊によって図書館の建物はロックアウトされた。5日おいた28日、教育人民委員A. ルナチャルスキーは「全革命権力に」のアップールのなかで、「図書館の自治化」についての決定を下した。同日ルナチャルスキーはヴェンゲーロフに宛てた次のような手書きの手紙を書いている。

1917年11月28日

学術研究所としての図書館が単なる誤解から内務省の管轄とみなされ¹⁴⁾、解散されたことを知り、私は内務人民委員に図書館を教育人民委員部の管轄下に移すよう依頼しました。

私は図書館を支配する気分、また労農政府に対するメンバーの敵意をよく理解

12) Машкова [11] p. 57 ([] は25—26ページ、参考文献の番号)

13) 水野忠夫 [16] p. 213—214.

14) 1917年10月内務省に帰属したが、学術的性格に変化はなかった、と Машкова [11] p. 58 にある。

しています。

しかしながら院の政治的方向性には目をつぶるよう努力することとして、院の文化的、学術的価値を考慮し、自治施設として図書館を再開することを決定します。多少なりと政府を刺激するような問題に関してはすべて私と個人的に接触されるように願います。

毎日3時から4時まで教育人民委員部で私と会うことができます。

教育人民委員A. ルナチャルスキー¹⁵⁾

この決定によって院の職員によるサボタージュは解かれ、12月3日の職員全体集会で図書館の活動再開が決議された。

B. ボンチ=ブルエヴィッチによると¹⁶⁾、十月革命後すぐヴェンゲローフはスモールニシの人民委員会議の総務部に行き、ボンチ=ブルエヴィッチに義務納本の法令公布に奔走していることを訴えた。ボンチ=ブルエヴィッチはそれについて努力することを約束し、ルナチャルスキーに連絡をとり、1918.2.24付の決定をみた、という。こうした接触を経てルナチャルスキーの図書館への対応、ヴェンゲローフへの手紙も書かれたと思われる。

12月8日にはすべての印刷所、出版所に向けて義務納本納入再開の図書館のアップールが出された。

図書館より

1917年12月8日

最近の出来事は新しく出版された印刷物の院への規則的な納入を乱し、その完全な登録、中央の国立の図書保存館：ロシア学士院、ロシア公衆図書館、モスクワのルミャンツェフ博物館等への供給の可能性も院から奪った。

印刷物保存の意義は計り知れないほど大きい。それは貴重であり、時として現代の政治的、社会的、文学の流れと趨勢を知る唯一無二の典拠となるやもしれない。これは価値ある資料である。これを基に歴史家たちはロシア生活の現代の非常時を学ぶであろう。そのために図書館はすべての印刷所、その他の印刷施設に対し、ロシアの学問、文化のために新しく出版されたすべての図書、パンフレット、雑誌、新聞、檄、ピラ等の8部義務納本を規定の納入証と印刷部数の指示をつけ、図書館（モルスカヤ街61）へ規則的に納入を再開されるよう切なる願いをもって呼掛けます。

15) Книжная палата... [9] p. 212

16) Бонч-Бруевич [4] p. 151

それとともに10月25日以降出版された印刷物をたとえわずかな部数でも図書館へ納入されるよう切望します。

図書館長 S. ヴェンゲローフ教授

詩人のマヤコフスキーは十月革命について「『受入れるか、受入れないか』—こんな問題はわたしには存在しなかった。わたしの革命なのだ。』¹⁷⁾と書いた。ヴェンゲローフにとって十月革命は「わたしの革命」はもちろん、「革命」ともいえない「非常」な「出来事」であった。だがありとあらゆる印刷物—重要と思われるものからそうでないと思われるものまで—をこの「非常時」の集成として記録し、保存することは彼の使命であった。

弟子であり、院の僚友でもあった A. フォーミンはのちに図書館長時代のヴェンゲローフを回想して書いている。

「飢えと寒さの時期、レニングラードがかって味わったことのなかった困難な外的状況のなかでさえも S. A. ヴェンゲローフは一度として打ちのめされることなく、いつも様々の創造的な思いつきや計画、进的エネルギーに溢れ、それは生涯の最後の日々まで変らなかった。院に生命を与え、院のように大きく複雑な機関を動かし続けた原動力は彼であったといっても過言ではない。われわれ若い助手たちが突上げたのではなく、それどころか老院長が、逆に彼が我々の生と勇気を支え、激励し、仕事へと促したのだ。」¹⁸⁾

モスクワの書誌家から「文学史的偏向」「現実逃避」と批判されていたペトログラードの書誌家たちは図書館に結集し、『図書週報』の改革に力を注いだ。彼らにとって『図書週報』は時代と結び合う証しであったのかもしれない。

5月の図書館創設ののち徐々に確立されていた納本体制は十月革命によって崩れ、印刷物の納入は停止した。地方からは「図書館は機能しているのか」、「印刷物の送付は必要か」、「臨時政府の決定は効力を保っているか」等々数多くの問合せが院に寄せられていた。

先に述べたようにヴェンゲローフの奔走によって、1918年2月24日教育人民委員部の義務納本に関する決定が出され、『イズベスチャ』No. 33に掲載され、4月27日付臨時政府決定の確認がされた¹⁹⁾。

17) 水野忠夫 [16] p. 213

18) Калентьева [7] p. 66

19) 教育人民委員部は、印刷所およびその他の印刷施設の全印刷物の8部納入義務に関する1917年5月15日の決定を確認する。

1. 印刷所およびその他の印刷施設は新しく出された各印刷物8部を図書館の

ドイツ軍がペトログラードに迫り、モスクワへの首都移転が4月に決行された。それに続いて他の多くの中央組織（図書館の所属していた教育人民部を含めて）がモスクワへ移転した。移転計画には図書館も含まれていたが、図書館はその計画に従わなかった。ボンチ＝ブルエヴィッチはヴェンゲーロフがこの計画を「不必要で、危険極まるものとみなし、断じて同意しようとしていなかった。」「老ベテルブルグ人である彼は『ピョートルの創造物』であり、彼の最も愛する詩人プーシキンがかつて暮した偉大なる都市と別れる気になれなかったのだ。」としている。そして「この移転こそが何にもましてその後の図書館の運命を決した。」とボンチ＝ブルエヴィッチは書いている²⁰⁾。

十月革命前首都の印刷所からの収集、院への納入にあたっていたペトログラード印刷委員部は今存在しなかった。教育人民委員部決定が出されたといえ、印刷物収集は困難を極めた。院の職員は印刷所の巡回、カタログの点検、書店めぐりなど可能な手段で収集にあたった。

1918年半ばごろになるとペトログラード、モスクワをはじめ、カザン、アルハンゲリリスクなどの都市からの納入はなんとか順調にゆきだした。しかし夏から本格化した内乱と外国干渉軍の戦乱のただ中であつたキエフ、オデッサなどからはまったく納入されなかった。鉄道、郵便網の分断も収集事業を妨げ、地方ソヴェトは若干の例外を除いて2月24日付決定を守らず、収集事業の困難は相変わらずであつた。

こうした事態を改善するため院は地方関係部門を設け、地方の担当機関と絶えず手紙をやりとりして仕事の重要性を説き、院への送付を注視した。さらに地方機関と直接に接触し、監視する代表者を各都市に置く院の地方代表者網の組織化を図つた。代表者には主に学者、作家、書誌家などがなり、彼らは院の職員として指示を受け、俸給も受けた。こうした代表者を置く都市は1920年には25を数えるようになった²¹⁾。

ために、出版後一昼夜以内に納入することが義務づけられる。(1918年1月29日付印刷に関する臨時規則に基づいた労農兵代表者ソヴェトへの納入とは関係なく)：

- a) ペトログラードでは印刷物は印刷所により直接図書館へ；
- b) 図書館支部のあるモスクワおよびその他の都市では、印刷物は印刷所によって直接支部へ届けられる；
- c) 院のために指定されたその他の地方では印刷物は権力の地方代表者：委員、労農兵代表ソヴェト等々に届けられる。その者たちは院の特別な指示に従ってそれをただちに図書館に発送すること。

2. この決定の不履行は国の法の前で責任を負う。

政府委員（ルナチャルスキー）

20) Бонч-Бруевич [4] p. 151

『図書週報』は1917年11月18日付 No. 41 以降中断していた。出版しようにもそのための資金がなかった。夏にヴェンゲーロフは資金問題解決のため自らモスクワに行き、その結果8月から9月にかけて1917年11月～12月分を収録した No. 42/44—50 が出版された。

10月から翌年1月にかけて、1918年分が出版され、これより『図書週報』は若干の変更がなされた。

1. 資料の排列（Ⅰ. 図書、Ⅱ. 檄とピラ、Ⅲ. プロトコール、報告、議事録……、Ⅳ. 楽符、Ⅴ. 異言語）
2. 分りにくい書名などに内容を付ける。
3. 件名、著者索引は年度の終りにまとめる²²⁾。

これは1918年半ばからひんぱんに会議を重ね、討議された『図書週報』改革案の、数ある試みのうち実現されたわずかな例である。また1918年分より院長ヴェンゲーロフ、トーロポフ、Ⅴ. ブッシュをメンバーとする『図書週報』編集部が置かれるようになった。ブッシュは図書登録記述部門主任として院の活動を支えた書誌家である。

さらに院の機関誌『図書院週報』が出され、1918年12月から1919年3月にかけてツルゲーネフ生誕110周年記念展示会が催され、多くの参観者を集めるなど、図書館は積極的に活動している。この時期に院はモスクワ移転を拒否するとの意向を固め、ヴェンゲーロフは政府に対し図書館のための独立した建物と院に関する特別法令の発布を求めてエネルギッシュに奔走した。ヴェンゲーロフはペトログラードにおいても法令の徹底化によって全国の印刷物収集、その他国の書誌機関としての活動は可能であると考えたのであろうが、内戦激化にともなう通信、交通網の遮断などの社会情勢もからんで中央との関係には不利であったことは否めない。

何はともあれ今、院の最大の課題は収録率を完全にすることであった。ヴェンゲーロフの完全さへの熱の入れ方は「この事業（印刷物収集—小林）に……彼は常に並々ならぬ注意を払い、新しい印刷物の院への正確な納入を個人的に監視した。どこかで院に入っていない新刊本を目にしたり、どこかで知ったりすると、S. A. ヴェンゲーロフは落胆し、興奮し、ただちにそれを手に入れるためにあらゆる方策を採った。このような並々ならない注意力と熱意をもってこの事業にかかわることのできたのは、生涯を本の奉仕に捧げてきたS. A. ヴェンゲーロフのような人だけであった」と当時彼の学術秘書をしていたフォーミンは記している²³⁾。

たとえばカリーニンのアジテーション列車や全露参謀本部列車で印刷物が出されて

21) 院は地方の書誌施設と接触を持ち、援助を惜しまなかった。

22) 件名、著者索引とも出版されなかった。

23) Калентьева [7] p. 63

いるのを知ると、ただちに檄、プラカードまでを含めたすべての印刷物の8部送付の依頼が当該機関に出され、印刷物を受取るようになった。院の努力がなかったら後世に残らなかった資料も少なくないと思われる。

しかし反革命軍と赤軍の熾烈な戦闘、荒廃した広大な国土にあって収集の完全さへの道は遠かった。

さらに地方はもとよりモスクワからの送付さえ滞る事態が生じた。1919年はじめ図書館モスクワ支部は労働者赤軍代表者モスクワ・ソヴェトの印刷部と合併、再編成され、『モスクワ図書館』と名称を変えた。その機能は曖昧であり、そのうえ移転と代表者ブリューソフの重病が重なり、ペトログラードへの印刷物の送付が停止した。さらにモスクワにならって地方でもエカテリノスラフ、キエフ、チュルニゴフにも図書館と名の組織が創られた。

さらに2月19日「^{プブリシイナ}公衆図書館への印刷物の直接2部送付」なるルナチャルスキーの法令が公示された。この法令は図書保存館に印刷物を確実に供給するための法令であった。ヴェンゲーロフはただちにルナチャルスキーに宛て、印刷物が図書館を通じて供給されていないとの公衆図書館政府委員の発言は事実と違うこと、法令は現行の納本制度を乱し、印刷物の収集と保存にとって悪い結果をもたらすとの抗議の手紙を送った。

図書館への事前の連絡なしに起った一連の事態はヴェンゲーロフらに深刻な打撃を与えた。院の幹事会は法令による現行の義務納本制の再確認を必要とみなし、3月15日「図書館への印刷物義務納本納入に関する法令」案をルナチャルスキーに提出した。この案は「なんらの新しい要求を含むものではなく、図書館に関する法規の総計と廃止された施設を現行のものに代替しただけ」²⁴⁾であった。この請願には公衆図書館の政府委員V. アンデルソンと学士院代表S. オリヂェンブルグも名を連ねた。

3月21日の幹事会で地方の状況視察と未納入の1917年からの印刷物収集を兼ねた職員の出張が決定された。地方における一連の図書館創設がその主要な動機であったことは想像に難くない。A. ベムによる4日～5月のウクライナ出張は貴重な資料収集とともにウクライナ図書館との関係を確立することができた。同年末のN. ヤコブレフのシベリア出張によって膨大なシベリアの印刷物を収集するなど実り多かった。

図書館からの法令案をルナチャルスキーはブリューソフを通じモスクワ図書館部の審議にかけた。案は以下の補足、訂正——1. 『図書館モスクワ支部』を『モスクワ図書館』とする。2. 納本部数を12部とし、4部をモスクワ図書館に納入する——を条件に受理され、再度の検討のため図書館に戻された。

24) Книжная палата... [9] p. 238.

これを受けた図書館は5月14日付『図書週報』に『ロシア図書館』と表示し、国の唯一の登録機関であることを示すとともに、6月19日人民委員ソヴェトに「ロシア図書館の名称をペトログラードの図書館だけのものとするのが印刷物の収集、保存館への供給には不可欠である」と訴えた。

だが事態の進展はなかった。図書館は現状にあっては法令化の実現がなにより必要であると判断し、モスクワ図書館部の補足、訂正に合意した。この間5月20日に「全露中央執行委員会の国立出版所に関する規則」が出され、出版活動の国立出版所への系列化がなされた。これにともない図書館も国立出版所の管轄下に入ったために、8月15日の法令公布の訴えは国立出版所になされた。

国立出版所改組後『図書週報』の出版は次第に断続的になり、1919年はNo.1—27, 31—34, 41—42だけで終る。国立出版所から不規則、不十分にしか紙を配給してもらえなかったため『図書週報』は若干の印刷所の援助でなんとか出版している状態であった²⁵⁾。「ペトログラードの『図書週報』の臨終の苦悶」の時期は徐々に迫っていた。

その後もなら進展しない法令問題打開のため10月10日には院の部門主任A. アレクサンドロフがモスクワの人民委員会議総務部長B. ボンチ=ブルエヴィッチに請願に出かけている²⁶⁾。

最終手段としてヴェンゲーロフが個人的にボンチ=ブルエヴィッチと国立出版所長V. ヴォロフスキーに手紙を書くことが12月19日の幹事会で決まった。

「公的な用事で私的な手紙をあなたに書き、しかも『個人宛』に出すとは、まったく異常なことです。しかし私はロシア図書館の真の困苦を助けていただくために他の方法を知らないのです。院の義務納本納入を義務づける法令公布に関する奔走、あるいはより正確には懇願は十ヶ月間停滞しています。手紙のやりとり、代表者のモスクワ行、文通、個人的談判は理論的には満足すべき結果をみています。はじめ教育人民委員部が二つ返事で、次にあなた、次にV. V. ヴォロフスキーがごく早い時期の法令公布を約束されました。しかし事態は進展していません。そして私たちは一連の地方の印刷物が1月1日から私たちへの納入を停止することもありうると危惧する資料的裏付けも持っています。どうぞ法令の公布を早めて下さい。図書館へ入ってこない図書は公衆図書館へも、ルミャンツェフ博物館へも、学士院へも入らず、つまり歴史から消失することを忘れないで下さい。また歴史家、書誌家、研究者が指針としている『図書週報』に図書が登録されなければ、その図書についての記憶自体も失われるのです。」

25) Калентьева [7] p. 64

26) この際ブリューソフとはモスクワ図書館との関係調整の方策としてペトログラード図書館の代表部をモスクワに置くことが話われた。

このころのヴェンゲーロフは私生活でも悲劇に見舞われていた。

「S. A. の個人生活は凄惨だった。まさに悪魔に魅入られたように彼の家庭は崩壊していった——夫人が死去され、続いてほとんど子供全員…… S. A. はただひとり残された。心の痛みを抑えつけないものと、彼は全身全霊で書誌に没頭した。文字通り我を忘れ、食事さえ、いうならばごく偶然に露店の物売りの皿から口に放りこまれた。」とボドナルスキーはヴェンゲーロフの追悼文で書いている²⁷⁾。1919年ペトログラードにはペストが蔓延し、多くの飢えに苦しむ人々の命を奪った。

1919年末になると『図書週報』は出版中止に迫られた。しかし院では法令公布後の『図書週報』改革のための会議がヴェンゲーロフのイニシアティブによってひんばんに持たれていた。改革案の眼目は『週報』を二部に分け、一部を新刊図書、雑誌の論評、書誌学の理論問題、書誌機関の情報、書評などにあて、二部を分類別排列による新刊収録誌にあてることであった。これは「単なる書誌の登録は多数の本から選択したいと思う際、何の助けにもならない」（ヴェンゲーロフ）との認識に基づいている。書誌における選択主義と網羅主義の問題は革命前後に様々な論議があり、ヴェンゲーロフは「書誌とは言葉の正確な意味において全き無差別の具現である」の有名な言葉とともに網羅主義を代表する書誌家とされてきた。それとの関連で「革命前ヴェンゲーロフが展開した書誌思想と比較すると、論評・推薦的資料を導入した『図書週報』改革の提案は著しい前進であった」とするソ連の研究者もいる²⁸⁾。

しかし改革案は実現されず、『図書週報』はペトログラードの図書館院の手を離れたのちも1926年まで従来通りの形式で出版された。

法令問題は年を越し、1920年1月ヴォロフスキーとボンチ=ブルエヴィッチからは人民委員小会議で早急に検討する旨の返事があった。小会議でも法令の必要性については意見の一致をみたが、論議の中心は図書館をペトログラードに残すか、モスクワに移すか、であった。ペトログラードを主張するヴェンゲーロフに対して、モスクワに移すべきであると主張した書誌家はB. ボドナルスキーであった。彼はモスクワのロシア書誌学協会会長であり、熱烈なデシマリスト、また十月革命を「迷いも動揺もなしに迎えた」前衛的な書誌家であった。

彼のペトログラード図書館院への態度は1920年7月にロシア書誌学協会で行った「ペトログラードの『図書週報』」²⁹⁾と題された報告によって知ることができる。「ペトログラード期における『図書週報』は再生不能の生ける屍となった……」で始まる彼の

27) Заслуженный... [5] p. 18

28) Библиография [2] p. 199

29) Боднарский [3]

痛烈極まる報告は、この期間にペトログラードで出版された重要な書誌すら登録していない収録率の低さ、半年あるいは年度ごとの著者、件名索引の約束不履行、分類、アノテーション、カタログギングなどの問題点をあげ、「専門家の立場からそれは一流のカタログではない」とし、「中央図書館は国家活動の中心モスクワに移すべきである」と結んでいる。義務納本が法令化されていない混乱した社会情勢下で、コーカサスの向う側からシベリアの果てまでの全印刷物の収集事業を考えると、ボドナルスキーの批判はあまりに厳しいが、図書館モスクワ移転の主張は説得力を持っていたと思う。

そしてついに1920年6月30日、レーニンが署名し、ソヴェト書誌事業の礎となった法令として有名な「ロシア・ソヴェト連邦社会主義共和国の書誌事業の教育人民委員部への移管について」が公布された。1920年8月3日教育人民委員部決定によって今後この事業は国立出版所につくられたモスクワの『ロシア中央図書館』が行うことになった。これにともなってペトログラードの図書館は廃止された。のちに「高度の技能を有する書誌家、要員を有する」として職員の削減とともにペトログラード図書館学研究所に改変された。『図書週報』未登録分の作業と出版もそこで行われ、1920年前半期はやっと1922年に出版された。

結局創立以来廃止までの『図書週報』への印刷物の登録件数は、1917年—13,144点、1918年—5,326点、1919年—8,377点、1920年(No.1—32)—2,811点である。これはこの期の全印刷物の約四分の一といわれている³⁰⁾。

ロシア中央図書館の初代院長にはボドナルスキーが就任した³¹⁾。レーニンの署名した法令をもとに出発する新しい図書館にふさわしい人事であった。直ちに9月7日付『図書週報』1920年 No. 33 はボドナルスキーの編集で出版をはじめた。

その一週間のちヴェンゲロフは六十五年の生涯を閉じた。ペトログラード図書館廃止は彼にとって生きる意欲を失うほどの打撃であったのだろう。

12月15日印刷物の収集と登録を三ヶ月あまり行ったロシア中央図書館ではボドナルスキーの司会で書誌会議がもたれ「旧図書館は自己に負わされた課題遂行のため可能な全てをなした」と述べている。60—70年代にかけて革命前後の書誌家、書誌活動についての研究がなされ、そこでも同様の評価がなされている。しかし困難な歴史状況のなかで精一ぱいの努力を払って、ペトログラード図書館は『図書週報』において何をなし遂げ、何をなさなかったのかの検証は必ずしもされているとは言い難い。そうした検証こそが今後必要と思われる。本稿がそのための一つの資料となれば幸いである。

30) Боднарский [3] p.154.

31) 1921年10月まで。後任N. ヤニツキー。

参 考 文 献

- [1] Автобиография деятелей книги в собрании С. А Венгерова. Публикация М. Д. Эльзова. (“Книга. Исследования и материалы” сборник, 29. М., Книга, 1977. 239 с. с.153—164).
- [2] Библиография. Общий курс. Учебник. Под ред. М. А. Брискмана и А. Д. Эйхенгольца. М., Книга, 1969. 560 с.
- [3] Боднарский Б. С. Петроградская “Книжная летопись” (“Советская библиография” 1 (18) 1940. с.153—161).
- [4] Бонч-Бруевич В. К истории организации Российской Центральной книжной палаты в Москве. (“Советская библиография” 1 (18) 1940. с.146—152).
- [5] Заслуженный деятель науки Богдан Степанович Боднарский. Статьи о его деятельности и список трудов. Под ред. Ю. И. Масанова. М., Изд-во Всесоюз. книжной палаты, 1963. 52 с. (Серия “Деятели книги”).
- [6] Здобнов Н. В. История русской библиографии до начала XX века. Изд. 3-е. М., Госкультпросветиздат, 1955. 505 с.
- [7] Калентьева А. Г. Влюбленный в литературу. Очерк жизни и деятельности С. А. Венгерова (1855—1920) М., Книга, 1964. 80 с. (Серия “Деятели книги”).
- [8] Книжная летопись, 1917—1920. Vadus, Kraus Reprint, 1964.
- [9] Книжная палата в первые годы Советской власти, 1917—1920 гг. Публикация И. Ф. Мартынова. (“Советская библиография” 1967, № 3. с.211—243).
- [10] Мартынов И. Ф. Русское библиологическое общество в годы Советской власти (1917—1931 гг.) (“Книга. Исследования и Материалы” сборник, 29. М., Книга, 1977. с.98—113).
- [11] Машкова М. В. История русской библиографии начала XX века (до октября 1917 года) М., Книга, 1969. 492 с.
- [12] Палей А. Выдающийся деятель книги. (“Альманах библиофила” вып. 2-й. М., Книга, 1975. с.58—60).
- [13] Рейсер С. А. Хрестоматия по русской библиографии с XIX века по 1917 г. М., Госкультпросветиздат, 1956. 447 с.

- [14] Шамурин Е. И. Всесоюзная книжная и развитие советской государственной библиографии (1917—1945 гг.) (Сорок лет советской государственной библиографии (1920—1960). Сборник статей. М., 1960. с. 10—61).
- [15] Whitby, Thomas J. Introduction to Soviet national bibliography [by] Thomas J. Whitby and Tanja Lorkovic. Littleton, Colo., Libraries Unlimited, 1979. 229p.
- [16] 水野忠夫 マヤコスキー・ノート 東京 中央公論社 昭48. 494p.



イメージ一新

開かれた新しいサービスのために——図書館家具ビブリオシリーズ

よりよい保管システムを提供する



日本ファイリング

本社…〒101 東京都千代田区神田駿河台1-6(主婦の友ビル) ☎(03)294-1751